

障がい者が「障害」を感じない社会とは

保健師 新藤さえ

講義の冒頭からドッキリしていました。

「日本の地下鉄で歩いていると障害を感じない」という先生のお言葉です。東京はバリアフリーだったのか…と。

路線図はややこしいし、乗り換えはいつも人混み、という視点しかありませんでした。

確かに標識や看板がなぜ「黄色」と「黒」で奇抜なのだろうか、なぜ階段一つ一つに線が入っているのか、気づいていても敢えて認識していませんでした。

障がい者が生活しているうえで障害を感じないこと、まさにノーマランゼーションの本質であると再認識いたしました。

スウェーデンの制度は、障がい者が障害を感じない社会を目指して様々な面白い取り組みをされているのだと学びました。送迎サービスでは、障がい者も、いつでも出かけた時に出かけられるように工夫されていて大変驚きました。また、LSS サービスのうち、とりわけ、パーソナル・アシスタンス・サービスに感銘を受けました。日本では副業が基本的に禁止されていますし、だからといって、ボランティアレベルで支えきれませんから、全く想像つきませんでした。「一人ではない」と安心できる素敵なシステムだと思いました。

さらに、障害をもつ子どもを持った親が、将来の事を想像できるように、国がどこまでサポートできるのかを議論されていること、とても大切だと思いました。日本で保健師として勤務していると、ダウン症や慢性疾患と共に生きる子どもをもつ両親を支援することがあります。「親が将来の事を想像できるように」と考えると、私の支援は、十分彼らが安心して暮らせるほど行き届いていないなと反省しました。

スウェーデンの教育に関して、小さい頃から障害がある子とない子の交流があることも魅力的だと思いました。たとえ障害や病気をもっていても、普通に生活できると知ること、健常者と障がい者の境界がなくなり、偏見も減るのではないかと推察します。今の日本は、障害や病気を持つ方々は、施設や病院など、日常生活の場から遠い所へ追いやっている印象があります。障がい者や病気を持つ方と一定の距離をもって関わるが増えてきました。そのために、彼らがどんな生き方をしているのか日常生活で学べる機会が減りました。現代を生きる日本の子供たちの想像力について、私はとても心配しています。

以上、スウェーデンの医療福祉や教育のあり方について特に印象に残ったことを述べさせていただきました。総じて、スウェーデンの制度は、人を見る目が優しい制度であると実感しました。どんな支援が欲しいかは、政治家や医療者ではなく、当事者が一番知っているのだという事実を前提に、考えつくされていると思います。

日本では、まだ支援者ありきの政策が多い印象です。「〇〇してあげる」支援という支援者の奢りと誤解がある気がします。その事実を気づいた人間として、私は、当事者を「支援をしてあげなければいけない人」ではなく、「誰よりも多くの喪失体験をした人生の大先輩」として学ばせていただく姿勢で関わりたいと思います。